＜前回：宗教哲学と地域性３、アジアあるいは日本＞

（１）東アジア・宗教とキリスト教

１．西欧キリスト教世界（古代、中世ヨーロッパ）との関係と差異

・宇宙論の位置

横山輝雄「日本における「科学と宗教」問題」（ポール・スワンソン監修『第13回南山シンポジウム「科学から見る「こころ」の意義　科学 こころ 宗教」』南山宗教文化研究所、2007年、34-48頁）。

「仏教教団にとって、「仏教と科学は矛盾しない」という図式が、都合のいい図式であったということです。・・・そうした事情から、仏教側は近代科学の世界像を受け入れたのではないかと思います。しかし、これは「敵の敵だから利用してやれ」という政治的な判断というよりは、もともと仏教には世界観問題や世界像問題に無関心の要素がかなり強か

２．東アジアあるいは日本

・宗教の主要な場：家族と国家、儒教、生命の連続性

↓

キリスト教との接点は、宇宙論よりも、家族道徳や政治神学にある。

cf. サタンの王国としてのローマ帝国

３．ハンス・キュング、ジュリア・チン『中国宗教とキリスト教の対話』刀水書房。

４．東アジアの宗教文化圏の共通構造：儒教文化圏、漢字文化圏

重層的な宗教多元性：基層／民衆宗教・民俗宗教／国家宗教・世界宗教

遠近構造：身近なものと通して遠いものと関わりを持つ

神仏習合のメカニズム

６．儒教の宗教性。

８．中国仏教の意義（インド仏教の漢訳化）

禅宗、浄土宗の成立、仏像文化の形成、儒教的な「家」の伝統との融合

９．中国→朝鮮半島→日本：渡来人の意義

10．神道という宗教

（２）京都学派とキリスト教

１．問いとしての「京都学派とキリスト教」

・「京都学派とキリスト教」の先行研究者。

古くは、滝沢克己、北森嘉蔵、武藤一雄らの先駆的な思索が存在し、現在も、小野寺功、小田垣雅也、八木誠一、そして、花岡永子、田中裕、浅見洋などの各氏。

・フリッツ・ブーリ：Fritz Buri, *Der Buddha-Christus als der Herr des wahren Selbst. Die Religionsphilosophie der Kyoto-schule und das Chtistentum*, Paul Haupt Verlag, 1982.

・藤田正勝、ブレット・デービス編『世界のなかの日本の哲学』（昭和堂、2005 年）所収の諸論考、とくに、ジェームズ・ハイジック（「日本の哲学の場所――欧米から見た」）とジョン・マラルド（「欧米の視点からみた京都学派の由来と行方」）。

２．三つのテーマ。

１）京都学派にとってのキリスト教。

２）キリスト教にとって京都学派との対論の持つ意義。

３）「京都学派とキリスト教」という研究テーマの展望。

３．「京都学派」について。

・京都学派を特徴付けるメルクマールを明確化する必要がある。

マラルド：「京都学派は不明確な境界線とその場合場合で変化する構成員をもつ『曖昧な集合』」（マラルド、32 頁）。次の「六つの基準」を指摘する。

・「『京都学派』という名称のもとで理解される人脈の範囲は一定しないが、ここでは『西田幾多郎と田辺元、およびこの二人のもとで何らかのかたちで〈無〉の思想を継承・展

開した哲学者のネットワーク』としておこう」との大橋良介（『京都学派と日本海軍――新史料「大島メモ」をめぐって』PHP 新書、2001 年、13 頁）の見解を参照。

京都学派とは、日本の近代化という歴史的文脈（対西洋、日本的伝統・仏教、国民国家・戦争）に位置し、西田・田辺との関わりから形成された知のネットワークと捉える。

・日本のキリスト教と京都学派とが、現代における宗教的問いと近代日本の歴史的状況とを共有していること。＝「京都学派とキリスト教」というテーマの成立根拠。

４．京都学派にとってのキリスト教

・京都学派：禅仏教（さらには浄土真宗）という日本・東洋の宗教伝統を背景とし絶対無という思想テーマを共有する知のネットワーク。

しかし、京都学派の思想家におけるキリスト教への関心。

・「西谷先生のキリスト教理解ないし批判的検討は、極めて精緻かつ広汎なものであって、欧米の神学者たちの学問的水準を凌駕するものがある」（武藤一雄、『神学的・宗教哲学的論集　Ⅲ』創文社、1993 年、168 頁）とは西谷啓治についての論評。そのまま西田や田辺にも当てはまる。

・京都学派は、制度的な教会的キリスト教よりもキリスト教の神秘思想をめぐる諸問題に注目している。

・神秘主義への理解あるいは評価に関する西田と田辺の間には相違。

しかし、京都学派がキリスト教においてしばしば高い評価を与えているのが、神秘主義であることは注目に値するであろう。これは、西田が「場所的論理と宗教的世界観」で述べる「内在的超越のキリスト」や西田と田辺がともに賛意を表している「万有在神論」という諸問題とも無関係ではない（武藤）。

５．キリスト教にとっての京都学派の意義

・「伝統的・保守的キリスト教に対する批判的・改革的志向において、現代のキリスト者ないしは神学者に対して、キリスト教の本来あるべき真姿を呼びかけられ、或る意味では御自分もその道を歩もうとされた。そういった点で田辺・西谷両先生は軌を一にするところがある。」（武藤、169 頁）

・京都学派のキリスト教理解はキリスト教への根本的な批判を伴い、日本のキリスト教が仏教あるいは東アジアの諸思想についての理解を深め、それらとの対話を遂行するという課題と結びつく。同時に神学と哲学との関係理解という問題連関にも及ぶ。

・西谷啓治『宗教とは何か』（創文社、1961 年）の議論。

近代以降のキリスト教が直面する諸問題（無神論、世俗主義、ニヒリズムなど）は、キリスト教自身のいわば本質に根ざしている。「近代的人間の立場がキリスト教からの乖離という方向を進んで来たということは、一体キリスト教のどういう点に問題があったからであろうか。そのことを、キリスト教の神観、特に神の超越性と人格性という点から簡単に考えてみたい」（西谷、43 頁。一部表記を改めて引用）。

・「罪の自覚、自由の自覚、時の一回性の自覚」という三つの事柄に結びつけられる（同書、227 ～ 231 頁）。

罪の自覚で問われるのは人間の自己中心性であるが、西谷によれば、この自己中心性は、キリスト教の歴史においては、宗教としてのキリスト教の自己絶対化の主張となって現象している（「選民の意識」と同様に、「宗教の次元にあらわれた自己中心性」）。ここにキリスト教の深刻な問題があることは、現代キリスト教思想で広範に意識されている通りである。また、時の一回性の自覚はキリスト教的歴史観を生み出し、それは終末論として展開されることになる。

↓

神の人格性と超越性はキリスト教の自己絶対化と非合理性を帰結し、近代キリスト教のアポリアを生み出す。キリスト教の根本に及ぶものであり、そこで問われているのは、

キリスト教は、現代人が「真の自己中心性」を実現するために、いかなるメッセージを語り得るのか、ということ。
・キリスト教思想の側からの応答。武藤一雄：キリスト教の神秘主義（パウロやルター）、シュライアマハーの高次の実在論、ブルトマンの非神話化論、ティリッヒの相関の方法を手掛かりに、現代における聖霊論（神の遍在の場所、無即愛）の構築を提唱。
６．展望
・京都学派との対話・対論、宗教的多元性の状況。
・「キリスト教の土着化」「福音の土着化」として実践的射程において問題とされてきた事柄。

11．宗教哲学と現代１
――科学技術・生命・心

・現代の科学技術の到達点。
生命から心まで科学の対象となり、そして技術の力が及ぶ範囲となった。
宗教（科学の及ばない範囲を宗教領域とする。科学の空隙を埋める神）には、もはや後退すべき領域は残されていない。再度前進するにかない。では、どうやって。
・心：最後の領域。宗教の直接の場。
「脳認知系の研究はすでに宗教を対象にしてなされてきた実証的研究と齟齬するものではないが、宗教についての新しい研究方法の可能性を提示する結果になっている。宗教研究者が独自の領域として設定してきた分野は、どういう意味において独自であったのか。それは他の領域の研究と比べてどのような特別な視点を必要とするかを、新しい視点のもとに考え直すことが求められよう。」（井上順考「宗教研究は脳科学・認知科学の展開にどう向きあうか」、宗教哲学会『宗教哲学研究』No.35. 2018、昭和堂）

１．「心を科学する時代」（「心」が科学的探究の対象となった時代）
心を科学する営みは、現代において急に始まった動きではなく、それは 19 世紀に遡る実証的な心理学、あるいは深層心理学・精神分析学において開始されていた。この一九世紀の流れから、宗教心理学や牧会心理学・牧会カウンセリングなど、キリスト教との接点が構築されてきた。
２．19 世紀からの「心の科学」の前史／現代の実験心理学、認知科学、脳科学との接点として、病と医療の問題。うつや統合失調症とも関わる虐待の問題／「脳科学と心」に隣接する分野として、霊長類研究とＡＩ（人工知能）・ロボット研究という対照的な二つの領域／現代のキリスト教研究との関わり。

（１）心を科学する時代へ

３．近代的学問の研究成果は、キリスト教神学にも無視できないものとなった。その焦点は、歴史研究に基づく聖書学。
・ちょうど自然科学に加わろうとしていた心理学（19 世紀後半から 20 世紀）も宗教をその研究対象としつつあった（島薗進／西平直編『宗教心理の探究』東京大学出版会）。
・心理学の知見は 20 世紀後半には積極的な意味が自覚。牧会心理学や牧会カウンセリングの登場。
魂への配慮（ケア）という考え自体は、キリスト教の初期に遡ることができるが、それが、牧会カウンセリングとして認知されるようになったのは、1920 年代以降。
・ティリッヒ：アメリカ亡命に先立つフランクフルト大学時代に、フランクフルト学派の思想家の影響で精神分析学に関心をもつ。
アメリカでのユングやフロム、そしてカレン・ホーナイ、ロロ・メイらとの交流を通し

て、牧会心理学、牧会カウンセリングに関する神学的論考として結実するのは、1950年代であった（『宗教と心理学の対話――人間精神および健康の神学的意味』教文館）。

↓

パネンベルク（たとえば、『人間学――神学的考察』教文館）も現代心理学の動向に強い関心。しかし、この時期までのキリスト教神学において視野に入れられたのは、主に精神分析学や発達心理学の理論であり、「心を科学する時代」に直接結びつくものではない。

（２）心の病をめぐって

４．脳科学の関連領域、中心には、病・医療の問題が位置。

社会脳研究：アレキシサイミア（失感情症）や自閉症スペクトラム。

前者が自分自身の情動・感情状態への「気づき」「言語化」における障害であるのに対して、後者は社会的な対人交流・コミュニケーションにおける障害という点で対照的であるが――前者は「自分のことがわかること」に関わる病であり、後者は「他人のことがわかること」に関係した病である――、人の心を理解するという点をめぐる障害という特性を両者は共有している。

「自分のことを理解するには、自分の外に視点を置かなくてはならない。その際に自分を理解する手法は、他人を理解する手法に近づくことになる。」（守口善也「アレキシサイミアと社会脳」、苧阪直行編『自己を知る脳・他者を理解する脳――神経認知心理学からみた心の理論の新展開』新曜社）

５．ミラーニューロン（サルにおいて見つかった、他者の運動を自分の頭の中で模倣・再現するかのように反応するニューロン＝自分と他者の運動の自動的なマッチングシステム）などと関連づけることによって、心の病の理解を試みている。

６．John Bickle（ed.）, *The Oxford Handbook of Philosophy and Neuroscience*, Oxford University Press, 2009.

７．自己理解と他者理解との共通性という問題は、ボンヘッファーが『共に生きる生活』で示した、「われわれは、ただ交わりの中にいる時にのみひとりであることができ、ただひとりであるもののみが交わりの中で生きることができる」との洞察と無関係ではない。

８．「不適切な養育」（マルトリートメント）による子どもの脳の損傷がうつや統合失調症などの病を引き起こすという指摘。

・「不適切な養育」と訳されるマルトリートメント（child　maltreatment）は、1980 年代になり児童虐待――身体的虐待、性的虐待、ネグレクト、心理的虐待――をより生態学的な観点から捉える際に用いられるようになった用語。虐待が脳に傷を残すことは小児精神医学において問題。

「精神的なマルトリートメントを受けても、外傷は残らないし、死に至ることもない――。本当にそうでしょうか？　・・・『こころ』、すなわち『脳』には大きな傷が残ります。そしてその傷の影響は、じわじわと子どもに現れてきます。・・・研究では、マルトリートメントの内容（種類）に応じて、脳の別の部位も変形することがわかっています。その結果、うつ状態になる、他人に対して強い攻撃性を示すようになる、感情を正常に表せなくなるといった症状が出てくる場合があります。・・・最悪の場合、犯罪や自殺に走る場合もあります。」（友田明美『子どもの脳を傷つける親たち』ＮＨＫ出版新書）

９．マルトリートメントによる脳の変形が問題として顕在化しないこともあるが、「いまのところは疾患などにも悩まされることなく、日常生活を送ってはいるものの、ひとつ間違えば、重篤な症状に陥る可能性もゼロではない」。

10．子どもの虐待。キリスト教とも無関係ではない。キリスト教をはじめとして、宗教においては、その活動が密室で行われることなどによって、しばしば性的ハラスメントや身体的精神的な暴力が行われてきた。もし、宗教の場における虐待やハラスメントが脳に損傷を与えるものであるとすれば、キリスト教はこの問題から目をそらすことは許されないだろう。脳科学の問題は、心や身体の病を通して、キリスト教の実践的営み、そして実践神学の問題領域と結びついているのである。

（３）霊長類研究から人間へ

11．認知科学の研究に隣接、霊長類研究。
近代以前の人間学が人間と神との比較（関係と差異）を主題としてきたのに対して、近代以降の人間学の特徴は人間を動物との対比によって論じる点に認められる。
「動物との距離の近さへの再認識が進むと、宗教心は人間特有のものであるというような考えにもメスがはいっていくことになろう。哺乳類、その中でも人間に近いされる霊長類などが、神やたましいのような目に見えない存在を感じているかどうかは分からない。死後の世界について考え得る脳の仕組みがあるかどうかもまだ分からない。目下の問題は、人間の宗教心というのは、他の心の動きと異なる独自の働きをもつものである、というふうに考えるのが適切かどうかである。」（井上順孝「宗教研究の新しいフォーメーション」、井上順孝編『21 世紀の宗教研究――脳科学・進化生物学と宗教学の接点』平凡社）

12．芸術。「チンパンジーがなぜ表象を描かないのか、という問いから、ヒトはなぜ描くのか、のヒントを探ることにした」として開始された「芸術認知科学」（齋藤亜矢『ヒトはなぜ絵を描くのか――芸術認知科学への招待』岩波書店）が、「チンパンジーたちも言語を習得することで、世界が少しカテゴリー化され、ある程度の記号的な見方をしているのかもしれない」と言われるようなヒトとの類似性を発見するとともに、「チンパンジーは、今ここに『ない』ものを見るよりも、今ここに『ある』ものをしっかり見ている。だからチンパンジーは、将来を考えて絶望しない」ことを指摘している。
では、宗教に関してはどうだろうか。
宗教に関わる霊長類との比較研究は、芸術以上にハードルが高いが、そのハードルも超えられないものではないように思われる。
「チンパンジーを見続けて 40 年が経過しました。・・・そして今ようやく、人間のすばらしさに気がついたと思います。想像するちから、希望をもつのが人間です。そして、その想像するちからによって、人間は心に愛を育んできました。」（松沢哲郎『分かちあう心の進化』岩波書店）

12．山極壽一『ゴリラからの警告――「人間社会、ここがおかしい」』毎日新聞出版。
「戦争につながる暴力は人間の本性であり、それを抑えるためにはより強い暴力を用いなければならないという誤った考え」、「この考えが世界に広がったのは第二次世界大戦の終了直後である。・・・この説は南アフリカでの人類の古い化石発見したレイモンダ・ダートによって提唱」、「ところが、その後明らかになった科学的事実はこの考えとは全く違う。」
「人間が同種の仲間に武器を向けたのは約１万年前に農耕がはじまってからの出来事で、人類の進化７００万年のごく最近のことにすぎない。戦争が人間の本性などどはとてもいえない。」
「集団間のトラブルに戦いという手段が用いられるようになったのは、人間がもつ高井共感能力が言葉によって目的意識をもち、集団への帰属意識を強めるために使われ始めたせいだと思う。」

13．言葉・文字という技術（ベルナール・スティグレール）

（４）ＡＩあるいはロボットは何をもたらすか

14. ＡＩ（人工知能）やロボットをめぐる研究領域。ビックデータ、ＡＩ、ディープラーニング（深層学習）。

・2010 年代に入ってからの第三次ＡＩブーム（「論理」をキーワードにした 1950 年代の第一次ブーム、「知識」をキーワードにした 1980 年代の第二次ブーム）：ビックデータとディープラーニング（統計処理にもとづく分類によるパターン認識）は、コンピュータの高性能化に支えられて進展し、その過程で、脳科学との関わりが顕わになりつつある（西垣通『ビックデータと人工知能――可能性と罠を見極める』中公新書）。

・ＡＩの第三次ブーム：人間のような知能をもつ、さらには人間以上の知能をもつコンピュータが話題となり――チェス、将棋、囲碁のプロ棋士を打ち破るソフトの登場――、「弱いＡＩ」（将棋や碁などの特定の目的に特化した「専用人工知能」）を超えて、「強いＡＩ」（人間のすべての認知能力を所有し自律的に振る舞うことができる「汎用人工知能」）が実現可能であるかのような楽観論まで登場している。

・レイ・カーツワイルによって有名になった、「シンギュラリティ（技術的特異点）」説の再評価。2045 年に、コンピュータやインターネットをめぐるテクノロジーの進歩が特異点に到達し、それによって人間の生活が後戻りできないほど変容（人工知能の能力が爆発し「不死」が可能になるとか、人間の低い知能では理解不可能になるとか）してしまうとかいう予言。

・西垣はシンギュラリティ説には批判的。ニック・ボストロム『スーパーインテリジェンス――超絶ＡＩと人類の命運』日本経済新聞出版社、マレー・シャナハン『シンギュラリティ――人工知能から超知能へ』ＮＴＴ出版。

　シャナハンは、シンギュラリティ説について踏み込んだ、しかも冷静な分析を行っている。「いつ実現するか、そもそも実現するかどうかは別として、特異点の概念そのものは知的な意味でかなり興味深いものだ」。

15. 西垣によれば、深層学習が人々にアピールしたのは、それが統計処理にもとづくパターン認識の精度を向上させたからだけでなく、脳の働きにかなり近づいているとの印象を与えたから――深層学習におけるニューラルネット（神経細胞網）と呼ばれるモデルの使用――。

・脳の働きを分析し、その結果をコンピュータ上に再現するという巨大プロジェクトが、アメリカやヨーロッパで進みつつある。脳の完全コピーに基づく脳エミュレーション（移し替え）という構想。

・やや気の早い科学者は、サイバネティクス的不死（脳エミュレーションによって身体の死の後も人格をコンピュータ上で存続させる）について言及。このＳＦ的な話が神学の周辺に迫りつつあることについては、Ｔ・ピーターズほか編『死者の復活――神学的・科学的論考集』（日本キリスト教団出版局）。

・ロボットをめぐるより古典的な問題：鉄腕アトムのような心をもち感情を理解するロボットは可能かという問題。

16. 西垣：生物と機械とのあいだの境界線は、深層学習などによって架橋できるようなものではないことを指摘。コンピュータは、プログラム（過去）に依存して作動する機械であり、ビックデータ時代になってもこの基本は変わりない。この意味で、機械は他律システムであり、それに対して、生命や心は、自律システムであることを特徴としている――人間の主体的自由や倫理的自律性はこれに依拠する――。ロボットが感情、心、人格をもつことができるかという問題は、少なくとも当面は否定的に応えることができる。

・そもそもロボットには自律システムとなるのに不可欠な「身体」が厳密には存在しない、

つまり他律的に作動する開放系であるからと言い換えてもよい。確かに、人間も身体を介して環境との間で情報やエネルギーの交換を行うという点では開放系であるが、それは、身体や心が閉鎖系であることに基づく開放性であって、そこにロボットとの根本的な相違がある。

・ロボットが巧妙なプログラミングの結果、あたかも心や感情をもつように振る舞うようになり、人間との見分けが困難になることはあるかもしれないが（苧阪直行編『ロボットと共生する社会脳――神経社会ロボット学』新曜社）、超えるべきハードルは想像以上に高い。

↓

ＡＩやロボットとの人間の比較が人間の固有性の理解を深める上で有益。
人間の知能とは何か？　そもそも知能検査は何を測定しているのか？

・西垣通『ＡＩ原論――神の支配と人間の自由』講談社メチエ。

（５）心を科学する時代におけるキリスト教研究

17. 脳科学・心とキリスト教思想、啓示論。
「啓示がどのように理解されようとも、啓示には人間の認知と知覚が伴う。そして、この認知と知覚によって、実際にあるがままにふさわしい仕方で啓示は認識されるのである。・・・啓示は自然界や物質界を迂回するものではない。・・・解釈と自己化のプロセスにも人間の知覚が関与しており、それを神学上の都合で簡単に排除することはできない。」（Ａ・Ｅ・マクグラス『「自然」を神学する――キリスト教自然神学の新展開』教文館）

18. マクグラス：有名なバルトとブルンナーの自然神学論争を再考。「エーミル・ブルンナーがカール・バルトよりも、神学と認知神経心理学によって生来の対話相手であたったかもしれない」との評価である。

・マクグラスのブルンナー論としては、Alister E. McGrath, *Emil Brunner. A Reappraisal*, Blackwell, 2014. が存在するが、認知科学との関わりでブルンナーに注目するのは、マクグラスだけではない。次の論考は、認知科学との関連でブルンナーの「神の像」論を取り上げている。Taede A. Smedes, "Emil Brunner Revisited: On the Cognitive Science of Religion, The *Imago Dei*, and Revelation, " in: *Zygon*, vol.49, no.1（March 2014）, pp.190-207）.